

今日の箇所は「愛の賛歌」と呼ばれ、結婚式などでよく読まれています。1~3 節で、愛を持っていなければ、どんなに優れた、よい賜物を持っていても、それらは何の役にも立たない、愛はあらゆる賜物が本当に生かされる道であり、どんなにすばらしい賜物を持っていても、この道を通らなければ、実りを生むことができないと語っているのです。私たちは、愛とは相手を思いやることだとか、親切にすることだというように、相手に対して積極的に何かをすることを第一に考えます。しかしパウロは、むしろ相手に対して寛容な思い、情け深さを持つことこそ愛だと語るのです。私たちの積極的な愛が、自分勝手な、独りよがりの愛になっているからかもしれません。相手を本当に愛するためには、先ず相手を受け入れることが第一なのです。

7節では 4 節以下のまとめとして、愛とは、どのような時にも、信じることやめず、希望を失わず、忍耐をもって愛し続けることだと語っています。ここに示されている愛の姿は、私たちが感覚的に、情緒的に抱いている愛のイメージとはかなり違っています。本当の愛とは、感情的な、情緒的な、一時のものではなく、むしろ、強い意志と決意を伴う、持続的な心のあり方なのです。

ここで、この「愛」という言葉の代わりに「私」という言葉を入れてみるとどうなるでしょうか。どうでしょうか。どう思われたでしょうか? あまりにも自分は、この愛からは遠いと思われた方があるかもしれません。パウロはこのような愛を、人間の追い求めるべき単なる理想として掲げたのでしょうか? そうではありません。ここに述べられている一つ一つが、イエスが私たちを愛するゆえに行ったことなのです。イエスは、私たちに対してどこまでも忍耐強くされ、神の子としての自分の自由や権利を捨てて、私たちの罪を背負って十字架にかかって死にました。そして、イエスの愛が注がれる時、私たちの中にも愛を形作られるのです。

今日の箇所でも愛と訳されている語は全てギリシア語ではアガペーです。愛と訳されるギリシア語には他にフィリアがあります。フィリアは一般的な愛、子どもの対する両親の愛、夫婦間の愛、兄弟への愛、友人間の愛、異性間の愛などを表し、アガペーは私たちのために命を捨てたキリストの愛、神の愛なのです。人と人とが生きる場所では、さまざまな摩擦があり、意見の違いがあり、衝突があります。また、人にはそれぞれ違いがあります。ところがそれらの違いに対して私たちは互いを思いやることが少なく、そればかりか、それらの違いが、時に人間の価値の違いであるかのように扱われることがあります。このような人間社会、教会の姿に対して、パウロは神の愛こそが情け深く、そして、どんなに素晴らしい人間の言葉もあらゆる知識も信仰さえも愛がなければ無に等しいと語ったのです。違いを違いとして尊び、私たちを愛して下さる神さまの愛に生かされる者でありたいと願うのです。